—Foreword—

生薬学の伝統と革新
—将来像に求められるものとは？—

伊藤美千穂

A Heritage of Pharmacognosy and Its Innovation
—What Is the Expected Frame for the Future?—

Michiho ITO
Graduate School of Pharmaceutical Sciences, Kyoto University, 46–29 Yoshida-Shimoadachi, Sakyo-ku, Kyoto 606–8501, Japan

6年制教育による新しい薬剤師の育成また現場の薬剤師に対する卒後教育を考えるとき，生薬・漢方薬とその関連領域は予想以上にニーズのある分野なのではないでしょうか．医学部での医師教育の中にも東洋医学が組み込まれ，また一般医薬品として多くの漢方エキス製剤が店頭に並ぶようになって，薬学における生薬や漢方薬の取り扱い，教育などについて方向性と内容が問われています．一方，日本薬学会の中には生薬・天然物部会が発足し，薬学研究の中における生薬学の位置づけを，その研究と教育に携わるわれわれが真剣に考え，将来についてしっかりとした展望を持って活動することが要求されています．そこで，本シンポジウムでは，生薬・天然物に携わる若手准教授，特に専門と立場を異にする30代後半から40代前半の研究者を中心に，自身の現研究状況や教育現場をご紹介頂き，その延長上にあるそれぞれの描く生薬学の近未来像を披露して頂きました．

具体的には若手5名が，食品薬学の視点から有用な薬理作用を有する食品素材についての探索研究について（近畿大学・森川敏生），私立薬科大学での最先端の6年制教育における生薬学の位置づけ（昭和薬大・中根孝久），天然有機化合物の構造と機能性についてのアドバンスト研究（熊大・池田　剛），幅広い領域を含み多くの異分野との融合領域をも併せ持つ生薬学の大局的視点について（京大・伊藤美千穂），生薬の産官学共同研究の可能性について（九大・田中宏幸）を講演し，それらの総括として2008年度日本生薬学会会長（慶応大・竹田忠紘）にご講演頂きました．その後，少し長めの時間を使ってフロアを含めた総合討論を行い，変革期にある薬学の教育と研究の現場において，生薬学の占める位置と求められている将来像について意見を交わしました．

総合討論ではフロアから示唆に富む発言を多数頂戴し，この分野に係わる教育研究者の真剣な態度と問題意識，現場での苦労などがあらわにされた形となりました．特に，薬学コアカリキュラムの中に漢方薬の知識についての項が明記されたことから，旧来の生薬学の講義を担当していた教員が，さらに漢方医薬学についても講義する必要性が出てきたことなど，薬剤師養成教育課程での漢方教育についての話題や問題提起が多くなされました．

特に，大学での漢方に関する教育の内容や方法については参加者の興味を多く集める話題のようでした．漢方医薬学については臨床研究やそれに密接に関連した実験研究が中心であることから，これまで薬学というよりは医学領域での研究が盛んに行われてきています．したがって，薬学領域の生薬学に携わる者は，生薬の個々の成分や薬理作用については詳しい知識もあり，たくさんの教科書や参考書もあって講義もし易いのですが，漢方の処方や理論，診断方法などについては自分自身でも勉強しながら講義を組み立てています，という方が多いようです．このため，何をどこまでどう教えるのか，といった基準のようなものが欲しいという声も聞かれました．

京都大学大学院薬学研究科（〒606–8501 京都市左京区吉田下阿達町46–29）
e-mail: michihoi@pharm.kyoto-u.ac.jp
日本薬学会第129年会シンポジウムS14序文

生薬学は薬学領域の中でも最も経験知豊かな，すそ野の広い分野の一つだと思います．今回のシンポジウムの討論では漢方教育が大きなテーマの一つとなりましたが，もちろん，生薬学の将来を考える際に挙げられるキーワードはそればかりではないでしょう．生薬学に携わる者それぞれが，研究であれ教育であれ各自の得意分野でオリジナリティーあふれる仕事を展開し，それらが互いに影響し合って生薬学の世界観が形作られていくのではないでしょうか．分析的な視野ばかりでなく，全体像をとらえた総合理解を意識してみることも，生薬学の将来像を考える上では重要なことだと改めて認識したシンポジウムの展開となりました．